

# 植民地朝鮮における標準語論\*

## 一方言調査を中心に一

邢 鎮 義\*\*

(e-mail: hjini117@hnu.kr)

---

### 目 次

---

1. はじめに
  2. 先行研究と研究方法
  3. 朝鮮と日本の標準語政策の概観
  4. 朝鮮における標準語と方言調査
    - 4-1 小倉進平の方言調査
    - 4-2 朝鮮語学会による方言調査
  5. おわりに
- 

## 1. はじめに

近代国家形成以降、「国語」構築において標準語は、国家的規範として機能してきた。しかし近年グローバル化が進むなか、多文化、多言語社会を現実の問題として受け止めなければならなくなった状況において、標準語の国家的規範の見直しについての議論が活発に行われている。そこで本稿では標準語の史的研究として、朝鮮語の標準語論について考察する。とりわけ標準語制定の過程における方言調査に焦点を当てて考察したいと思う。

---

\* 本研究は、2009年度住友財団「アジア諸国における日本関連研究助成」（財団登録番号：098325）によるものである。

\*\* 韓南大学校助教授 日本語学・社会言語学

「方言」は近代以降、標準語制定の過程において「標準語vs方言」の**関係**として生まれた**概念**で、標準語を成立させるもっとも重要な要素である。言い方を換えれば、方言の存在によって標準語は成り立つものであり、方言なくして標準語はあり得ないといえる。そして方言は標準語制定の過程において、**全国**にわたる「方言調査」によって、その**概念**が**広まり**定着するのである。そこで本稿は、朝鮮における方言調査に焦点をあてて論を進めていきたいと思う。

なお、これまで**韓国**での標準語に**関する**研究は、**国語学**研究分野を中心に盛んに行われているものの、「標準語」とは如何なるもので、朝鮮語における標準語は、どのような**経緯**で生まれたものか**に対する**考察は不十分なまま、標準語ありきの研究にとどまっていたといえる。韓国の標準語に**関する**ほとんどの研究において、1936年「朝鮮語学会」による標準語規範を、朝鮮語における標準語の**出発点**としているのもその**証拠**である<sup>1)</sup>。

しかし周知のとおり朝鮮は植民地支配と近代化が同時進行で行われたため、朝鮮語の近代化も**相当**の部分が植民統治下に行われたことは認めざるを得ない。当然のことながら朝鮮語の規範化と標準語制定などに、**総督府**や**日本人研究者**の役割があったことは確かであろう。そしてその役割というのは、つまり、朝鮮語近代化における日本側の構想と**具体的な**方法は、ほぼ同時進行で行われた日本の「**国語**」構築からヒントを得たものと言える。そこで本稿では、植民地朝鮮における標準語論として、方言調査の**出発点**に**触れ**、日本と比較しながら考察したい。

## 2. 先行研究と研究方法

日本では1990年代後半から、近代国民国家における「**国語**」及び、言語ナショナリズムに**関する**研究が**社会言語学**分野において盛んに行われた。イ(1997)、安田(1998)、(1999)などである。これらの研究は近代日本の「**国語**」構築の過程を考察することで、自明の存在として受け止められきた「**国語**」に意義をとなえる**研究**で、標準語制定と方言調査、**方言学**の成立などを取り上げている。とりわけ安田(1999)は、小倉進平の朝鮮での活動に**焦点**を**当てた**研究で、小倉の朝鮮語に**関する**研究を、日本の「**国語**」構築との**関係**のうで考察している。

**韓国**における**研究**は、**国語学**分野における**研究**として、金敏洙(1973)、金亨圭(1974)、高永根(1998)、李秉根(2006)などがある。このうち金敏洙(1973)は韓国の**国語政策**のながれからの考察で、**文化史的研究**といえる。そして高永根

1) 金(1973)、高(1998)などを参照されたい。

(1998)は**韓国**の近代化の過程の中での、**朝鮮語研究**を研究者を中心に考察しており、**当時の朝鮮語研究の全般**を把握するのに**参考**になる。しかしこれらの研究で注意したいのは、**朝鮮語における規範化、標準語整備の始まり**を、1936年「**朝鮮語学会**」としている点である。

そして金亨圭の『**韓国方言研究**』(1974)は、**韓国**の方言調査の資料集として、項目別調査を行い、それをまとめたものである。この書の序言には、「これまで**韓国**の方言研究には、小倉進平博士の『**朝鮮語方言研究**』と河野六郎の研究資料しかなかった。筆者もその範疇を越えることができず、その都度、**残念な思い**でいっぱいであった」と述べ、『**韓国方言研究**』はその限界を越える研究であるとしているものの、**実際**の方言調査の手法と内容は小倉の研究と類似している部分が多く、**韓国**の方言学**研究**における小倉の陰を物語っているように思われる。そして李秉根(2006)は、小倉進平の方言調査に焦点をあて、**方言学**の**観点**から考察している。

本稿はこれらの**研究**に基づきながら、植民地時代の方言調査をとりあげ、**朝鮮**における**標準語**成立との**関係**で論を進めていきたいと思う。具体的には小倉の方言調査と「**朝鮮語学会**」が行った方言調査が中心となるが、とりわけ両方の接点に注目し、論を進めたいと思う。

### 3. 朝鮮と日本の標準語政策の概観

朝鮮の標準語政策は**既述**のように、日本の植民地支配下に行われ、その理念と方法において**影響**を受けたと思われる。そこで本節では、日本の標準語政策を中心に**概観**しながら、朝鮮との**相関関係**について考察したいと思う。

日本における標準語の**概念**は、1895年、上田万年が『**帝国文学**』創刊号に**発表**した「**標準語に就きて**」によってもたらされた。そこで上田は、標準語とは「**実際話**される言葉で、**東京**の**教育ある人々の言葉**」と定義した。今日に至るまで、日本の標準語の規範の根幹をなすことになるこの定義は、「**実際話**されることば」において「**現在**」という時代的基準を示し、「**東京**」においては**地域的**基準を、「**教養ある人々**」においては**社会的**基準を示している。地域・社会(階級)・時代の基準は、**社会言語学**の研究領域において**言語使用様相**や**言語変種**、**変異**を把握するのに**有効**な基準となるが、近代「**日本語**」におけるこの基準はヨーロッパ帰りの上田によって、標準語の規範をとおして日本にもたらされたのである。

一方、今日の「教養のある人々が使う現代のソウルの言葉」（文教部告示第88-2号）という「韓国語」<sup>2)</sup>における標準語の規範は、1912年朝鮮総督府の第一回諺文綴字法である「普通学校用綴字法改定案」に「本表記法は、京城語を標準とする」としたことから始まる。その後1921年の第二回諺文綴字法改定において「用語は現代の京城語とする」と示した。そして1936年、朝鮮語学会は「査定した朝鮮語の標準語集」を刊行し、「標準語は大体現在中流社会で用いられるソウルの言葉とする」として標準語の規範を示して、今日に至っている。

朝鮮語における標準語の地域的基準は「ソウル」であり、社会的基準は「中流社会」、時代的基準は「現在」と規定しており、これはいうまでもなく日本の標準語の規範をそのまま採用したものである。

ところで、「東京」あるいは「ソウル」という地域、「教養ある人々」、「中流社会」という階級など標準語を支える基準は、きわめて曖昧で自然体の言語の姿ではあり得ない基準である。イエスペルゼン (Otto Jespersen) の「標準語とは我々はその発音を聞いて、どの地方の人か判断できない言葉である」という指摘からわかるように、標準語はどの地方にも属さない、まったく新しい変種の言葉である。つまり、そのような人為的な言葉をつくっていくのが、近代における標準語政策といえよう。そしてその核心であり、第一歩は方言調査であった。しかし強調しておくが、日本の場合、方言調査の結果から標準語を定めたのではなく、「東京の教育ある人々のことば」というイメージにあわせてつくっていくのである。

日本においては、1902年管制施行される「国語調査委員会」により、日本で初めて標準語制定のための方言調査が行われたのは周知のとおりである。同委員会は38項目の質問紙をつくって、全国の小、中学校、師範学校などに送付し回答を得る方式で方言調査を行い、それを『口語法調査報告書』としてまとめ、さらにこの書に基づいて『口語法』と『口語法別記』を刊行して「東京の教育ある人々の言葉」という標準語の規範を具体的に示したのである<sup>3)</sup>。この調査は日本の標準語制定において決定的な根拠になったのは言うまでもないが、この調査によって日本の方言学が始まったこと、そしてそのまま植民地朝鮮の方言調査と方言学、方言地図などに影響を及ぼしたことに注目したい<sup>4)</sup>。

2) 本稿で取り上げる言語問題は、主に植民地時代の言語で、韓国語成立以前の問題である。したがって当時の名称を用いて「朝鮮語」とするが、必要に応じて「韓国語」も用いることにする。

3) 日本の方言調査に関しては、邢[2008]を参照されたい。

4) 「方言」という概念がなかった朝鮮において、最初に方言調査を行い、方言研究のスタートを切ったのは、本稿で取り上げている小倉進平によってである。この小倉の調査と研究は、1903年日本で行われた「国語調査委員会」による方言調査を認識しており、それを参考していたと思われる。なお、朝鮮人による朝鮮の方言研究の始まりである崔鉉培の『方言採集手帖』（1936年）も、日本の国語調査委員会の方言調査に加わり、後に日本の

## 4. 朝鮮における標準語と方言調査

朝鮮語における標準語の規範の始まりは、既述のように1912年朝鮮総督府の第一回諺文綴字法であると思われる。それ以前の朝鮮の言語状況は、公式文章は漢文が主流をなしており、朝鮮の固有文字であるハングル文章は、<sup>オンハムン</sup>諺文と呼ばれ蔑まれ、限られた一部でしか用いられなかったため、当然のことながら「朝鮮語」における標準語の概念は存在しなかったと言える。しかし1894年甲午改革を期に、公文書にハングルまじりの「国漢文混用文」が公式文章として登場することで、ハングルの規範に対する認識が生まれ始めた。ところがこの当時の「国漢文混用文」というのは、助詞をハングルに当てる程度の文章であったため、ハングルの規範に対する認識は微々たるものであったといえる。そして1910年韓日併合と同時に朝鮮総督府の植民地統治が始まり、いわゆる近代教育の本格的なスタートと共に、朝鮮語は外国語として教科目に取り入れられ、朝鮮語の近代語としての規範が必要とされるのである。もちろんこの当時まで朝鮮語にいかなる規範も存在しなかったというのではない。例えば周時経は、1893年『国語文法』、1897年『国文論』などを通して、朝鮮語の規範を研究していた<sup>5)</sup>。しかしこれは個人による研究で、国家システムによる拡大と普及という面からみた場合、その影響力には差があると言わざるを得ない。その意味で本格的な朝鮮語の規範の始まりを、植民地以降とみてよかろう。そして朝鮮語における標準語論も、同じ文脈で理解して良いのではないかと思われる。

そこで朝鮮の植民地時代に行われた小倉の方言調査に注目し、朝鮮語学会による方言調査と結び付けて考察したいと思う。

### 4-1. 小倉進平と方言調査

小倉進平(1882年～1944年)は、1906年東京帝国大学文科大学文学科(言語学専攻)を卒業し、同大学国語研究室の助手をへて、1911年5月から朝鮮総督府に勤務することになる。朝鮮総督府においては編修官をへて、京城帝国

方言学、方言地図の基盤をつくる東条操の『簡約方言手帖』の手法をそのまま取り入れるなど、日本の同委員会による方言調査は朝鮮の方言調査及び方言学に多大な影響を及ぼしたと思われる。

5) 周時経の研究は厳密にいうと文法研究である。近代における文法研究は文献学的な研究ではなく、話し言葉に基づいた口語文法であり、周時経の『国語文法』も朝鮮語の研究であった。したがって、周時経の研究は、近代語としての朝鮮語の研究としてとらえ、標準語整備と共に広い意味で朝鮮語の規範化としてとらえたいと思う。

大学教授となり、1933年から東京帝国大学教授兼京城帝国大学教授を勤め、1943年退官、翌年亡くなる。つまり小倉は、半生をほぼ朝鮮語の研究に努めたことになるが、その30余年間の研究業績は主に朝鮮語の音韻、文法、方言調査であった。

とりわけ方言調査において、「私は総督府にあり、京城帝国大学にあり、公務の少暇を利用しては、幾回となく、長期短期の朝鮮内旅行を試み、約二十箇年に亘り、極めて大略ではあるが、全鮮各地に遍く足跡を印するに至った」（小倉[1944下：8頁]）としていることから、朝鮮において最初となる小倉の方言調査の様子や熱意がうかがえる。さらに「私は旅行毎に其の調査の結果を雑誌などに公表する方針を採っていたため、方言に関する片々たる報告は今日まで十数種に及んでいる」として、調査の結果をまとめた論文の目録を『朝鮮語方言の研究』の中で、以下のように紹介している（小倉[1944下：8～9頁]）。

- |                    |                        |
|--------------------|------------------------|
| 1. 「済州島方言」（1・2・3）  | 『朝鮮及満州』1913年3・4・5月     |
| 2. 「西部黄海道方言」       | 『朝鮮教育会雑誌』1914年4月       |
| 3. 「慶尚南道方言」        | 『朝鮮彙報』1915年4月          |
| 4. 「慶尚南北道方言」       | 『朝鮮彙報』1916年5月          |
| 5. 「京元咸鏡鉄道沿線方言」    | 『朝鮮教育研究会雑誌』1917年5月     |
| 6. 「忠清南道の方言について」   | 『朝鮮教育研究会雑誌』1918年8月     |
| 7. 「全羅南道方言」（1・2・3） | 『朝鮮教育研究会雑誌』1919年5・6・7月 |
| 8. 「咸興地方の方言」       | 『朝鮮教育研究会雑誌』1920年11月    |
| 9. 「全羅北道及忠清北道方言」   | 『朝鮮教育』1922年2月          |
| 10. 「慶尚北道方言」       | 『朝鮮教育』1923年3月          |
| 11. 「嶺東方言」         | 『朝鮮』1923年7月            |
| 12. 「咸鏡南北道方言」      | 『朝鮮語』（朝鮮語研究会）1927年4月   |
| 13. 「嶺西方言」         | 『文教の朝鮮』1928年3月         |
| 14. 「済州島方言」        | 『青丘學叢』1931年8月          |

これらの論文の目録を見る限りでは、済州島から咸鏡道まで朝鮮半島全域がほとんど網羅されており、さらに詳しい調査地点としては「各郡廳所在地を取り、必要に応じ随時其の他の地点にも及んだ。而して今日まで調査し得た地点の数は全鮮を通じて二百箇所以上に及ぶが、一略一」（小倉[1944下：11～12頁]）とも述べていることから、まさに朝鮮半島津々浦々、調査で回っていたことが分かる。

そしてこれらの資料を総括して試論として雑誌、論文集などに発表したものは、1924年、「朝鮮語の歴史的研究上より見たる済州方言の価値」、「新羅語と慶尚北道方言」を筆頭に、1943年「大邱付近の方言」に至るまで23編に及んでいる。さらに単行本としては『南部朝鮮の方言』（1924年）、『平安南北道の方言』（1929年）、『咸鏡南道及び黄海道方言』（1930年）、『朝鮮語に於ける謙讓法・尊敬法の助動詞』（1938年）、『The outline of the Korean dialects』などを著わしている<sup>6)</sup>。

さて、これらの調査と研究は、どのようにして行われたのか、簡単に見ておきたい。まず、調査方法は、既述のように出張などの機会を利用して、朝鮮半島全域を直接回って行った実地調査であった。方言調査方法としては、調査質問紙を現地に送付して回答を得る通信調査と、直接現地に出向き対面して行う実地調査に分けることができるが、正確度から判断すると、実地調査の方が信頼できる結果が得られるのは言うまでもない。日本における最初の方言調査が通信調査であったため、正確度が欠けるという批判があるのに対し、小倉による朝鮮の方言調査が、韓国の国語学界で信頼できる資料とされる所以でもある。

そして調査対象は、現地の普通学校の上級学年約10名を対象に調査を行っている。その理由について「調査の目的からいふと、老人殊に婦人などに就くのが最もよいのであるが、此等の人々は長時間の調査に堪へず、且つ質問の回答に要領を得ない場合が多いので、已むを得ず略-」（小倉[1944下:12頁]）と述べており、調査対象に関する問題点は自覚していたと思われる。その問題点というのは、被調査者が学校教育を受け、教育を通して標準語なるものの影響を受けると、その地域の方言は何らかの形で変形する可能性があるため、本来の地域語を調査するには、なるべく外の影響を受けていない人を被調査者とするのが望ましい。しかし調査対象の問題は、朝鮮に先立って行われた日本の国語調査委員会による方言調査も、各地の師範学校と小、中学校を中心に行われており、小倉も朝鮮の方言調査の際、日本の調査を参考したと思われる。

調査項目は名詞がメインで動詞、形容詞、助詞、助動詞が含まれている。名詞は「天文、時候、地理・河海、方位、人倫、身體、家屋、服飾、飲食、農耕、花果、菜蔬、金石、器具、舟車、飛禽、走獸、水族、昆虫爬蟲、草木」の項目からなっており、さらに「天文」には「天、日、日蝕、日光、曉-略-」といった類に、細かく単語をあげていく。動詞は「堪える」、「養う」など70用例を中心に、形容詞は「軽い」、「深い」など36用例を中心に調査を行っている。

このような調査方法は、小倉自身「我が国に於ても以前から数種の方言採集簿

6) 小倉進平の『朝鮮語方言の研究』下巻(1944)による。

と称するものが行われて居る」と述べているように、日本では1903年から国語調査委員会を中心にすでに方言調査が行われた。小倉も概ね国語調査委員会の方言調査を参考にしたと思われる。朝鮮において最初となったこの方言調査は、日本の国語調査委員会による方言調査と比べると、その範囲や方法、結果の抽出など、個人による調査の限界を表わしている部分もあるが、小倉の方言調査により「方言」という概念がなかった朝鮮において、標準語なるものと方言なるものに対する認識が広まり、用語として「方言」が広まる契機となった。さらに方言調査の必要性と手法を伝えたことは注目に値する。

そしてもう一つ付け加えなければならないのは、小倉の朝鮮語研究と方言調査の背景である。小倉は1944年亡くなるまで『朝鮮語学史』、『朝鮮語方言の研究』をはじめ、朝鮮語に関する著書14冊と129本の学術論文を残しており、朝鮮語研究における足跡はけっして小さなものではない。このような朝鮮語研究については、小倉自らも『朝鮮語方言の研究』において「私は明治四十四年渡鮮、職を朝鮮総督府に奉じ、教科書編纂事業に従事したが、私の本来の目的は朝鮮語の研究にあった」<sup>7)</sup>と述べている。つまり小倉の朝鮮総督府への赴任は、朝鮮語研究のためであったわけだが、小倉がなぜ朝鮮語研究に関心をもつようになったのかについては、これ以上の言及がないため、詳しくは分からない。しかし小倉は東京帝国大学時代、上田万年、金沢庄三郎、藤岡勝二、保科孝一などに教えられたことから、日本の「国語」構築の一環として、日本の一方言として朝鮮語の研究に励んだことは容易に推測できる。上田万年や保科孝一は日本で初めて、国語と民族と国家を一体化する国語構築に励んだ人物として、国語を通して国民の連帯感をもたせると唱え、近代日本における国語の土台をつくった人物として有名である<sup>8)</sup>。とりわけ金沢庄三郎は当時東京帝国大学で朝鮮語学を教えており、小倉も金沢のことを「恩師」と称し、金沢から朝鮮語及び朝鮮語学を学んだとしていることから、金沢の影響が大きかったのは確かであろう。

金沢庄三郎は1910年『日韓両国語同系論』、1929年『日鮮同祖論』をとおして朝鮮語と日本語の「同系」を証明しようと努めた研究者であることはよく知られている。小倉が金沢の影響を受けて朝鮮語の研究に取り組んだとすると、小倉の方言調査も日本語との系統関係を究明するための研究であったといえよう。小倉自身も、次のように述べている。

濟州島は全羅南道の南海中にあり、言語的にも孤立中にある。かつてその位置

7) 小倉進平『朝鮮語方言の研究』下巻 (1944)

8) イ・ヨンスク[1997]、安田敏朗[1998]などを参照されたい。



が遙かに日本の諸島と相呼応する**状勢**にあるより、**対馬**の場合と同じく、**濟州島**の方言は朝鮮語と日本語との混淆により成るものであるなどいふ**説**が、余程以前から一部の人の間に行われてきた。それらの**事実**の見極めをなすべく、私は大正元年冬及び昭和五年、六年の二回に**互**り該島に赴いた。(小倉[1944下:593頁])

朝鮮における最初の方言調査は、以上のように小倉個人の**研究**として行われたといえるが、調査の動機は、日本の「**国語**」構築の一環であり、調査方法は日本の「**国語調査委員会**」の方言調査からヒントを得たものであったと思われる。そして小倉による朝鮮の方言調査は標準語制定のための調査というより、朝鮮語の**歴史的**、**比較言語学的**見地からの**研究**であったと言えよう。しかし朝鮮における最初の方言調査となる、この調査によって朝鮮に「**方言**」という**概念**が広がり、方言調査の意義と手法を**伝**えた点、朝鮮における**方言学**の基礎をつくった点、これらの点が後の「**朝鮮語学会**」の方言調査につながるの**は**言うまでもない<sup>9)</sup>。

#### 4-2. 「朝鮮語学会」による方言調査

朝鮮語における標準語整備のための方言調査は、民間団体である「**朝鮮語学会**」が中心となって行った。同学会は1931年から「**朝鮮語学会**」として活動をはじめたが、それは朝鮮語の**研究**というより、「**ハングル運動**」の性格を帯びた朝鮮の文化運動として位置づけられる。具体的には朝鮮語の正書法の改良、標準語の選定、**辞典**の編纂などに取り組んだ。

**朝鮮語学会**による方言調査は、同学会の**機関誌**である『**한글(ハングル)**』に地方の方言が紹介され、それが契機となって行われた。最初の投稿は、朝鮮語講習会の講師として**全国**を回っていた李常春が『**한글(ハングル)**』第一巻六号(1927年8月)に「**松島方言**」と題し、2頁にわたり松島の方言を紹介し、標準語との違いについて記している。その後、同じく李常春が咸鏡道の方言を『**한글(ハングル)**』第一巻二号(1932年2月)に紹介した。1933年8月には吳世濬が海州方言を『**한글(ハングル)**』第一巻九号に紹介している。

これを契機に『**한글(ハングル)**』第三巻八号(1935年10月)から「**方言調査**」という欄が設けられ、**全国各地**の方言を紹介するようになる。同誌には、次のような方言募集のための呼び掛けが、**広告欄**に**掲載**されている。

9) ちなみに、韓国の方言研究において古典のように参考になる金亨圭の「**韓国方言研究**」は、小倉の方言調査の方法をそのまま取入れたものである。

朝鮮語辭典會を中心に各地方の方言募集のために、4、5年前から京城府内の中等学校以上の学生を総動員し、夏期休暇で帰郷する学生に方言を募集させたのであるが、すでに募集されたものが、一万語余りとなった。これを漸次整理して辭典の語彙として収録する予定である。この誌面に方言調査欄を特設したので、だれでもこの欄を利用していただきたい。

つまり、朝鮮語学会による方言調査は、朝鮮語辭典の編纂のための調査であったことがうかがえる。植民統治下の朝鮮の標準語は日本語であるため、朝鮮語の標準語は政策として示されるのではなく、『朝鮮語辭典』（1920年）、『조선어표준말모음(朝鮮語標準語集)』（1936年）などによって示され、整備されたことを考えると、この調査は朝鮮語辭典の編纂のためでありながら、標準語整備のための方言調査ととらえてよからう。

さて、『한글(ハングル)』第三卷八号(1935年10月)から始まった「方言調査」欄は、第十卷二号(1942年5月)まで55回にわたって続く。自発的にそれぞれの地方で話される方言を調査して『한글(ハングル)』誌に寄せる方式で行われたこの調査は、主に学校の教員が生徒から集めた方言を紹介している。そして冒頭には「ハングル研究に役立てたい」、「朝鮮語学会の辭典編纂に助けになれば幸である」という主旨が添えられており、方言調査＝ハングル運動＝民族文化運動という当時の社会雰囲気を読み取れる。しかし方言調査に方針があったわけでもなく、方法や要領に関する指導が行われたわけでもなく、ただ、地方の言葉を標準語と対比しながら紹介するのみであった。たとえば、次のような例である。『한글(ハングル)』第四卷三号(1936年3月、全南咸平から寄せられた方言)

서울말          사투리  
 가가(店)-----가개  
 가지(茄)-----까지  
 꼬리(尾)-----꼬지, 꼬랑지, 꼬래이, 꼬랭이  
 개구리(蛙)----개굴래기, 개구리, 개구락지, 개구락대기

日本の方言調査のように国家機関の主導のもと、専門家の指導で行われた調査とは異なり、この調査からどれだけ意義のある結果が得られたかは別として、この調査によって、朝鮮語辭典の形で朝鮮語の標準語が整備され、これらの資料により朝鮮の方言地図、方言区画論、方言採集手帖など、方言学の基盤が整ったことは注目に値する。

## 4. おわりに

冒頭で述べたように、韓国の国語学研究において朝鮮語の標準語は、1933年「한글 맞춤법 통일안 (ハングル綴字法統一案)」、1936年「사정한 조선어 표준말 모음 (査定した朝鮮語標準語集)」、1947年『조선말 큰 사전 (朝鮮語大辞典)』の流れで整備されてきたとされている。朝鮮語学会によるこれらの業績は、朝鮮語の近代化、規範化、標準化に決定的な役割を果たす。しかしこのようなことができた背景には、小倉進平の活躍があり、また、それは近代日本の国語構築の手法から学んだものであると思われる。

小倉は日本の近代国民国家形成と「国語」構築の最中に、東京帝国大学にて言語学を勉強し、日本の植民地となった朝鮮において、自分の学問を完成した。その学問の主な内容は、朝鮮語の規範化と朝鮮の方言調査である。そしてその研究は日本の「国語」構築の一環として位置づけることができるのである。

もちろん小倉による朝鮮語研究及び朝鮮の方言調査は、広く朝鮮語の研究であって、標準語制定のためのものであったとは言いがたい面があるのも確かである。しかし朝鮮語学会の標準語整備のための『朝鮮語大辞典』の編纂過程に行われた方言調査と研究は、小倉の研究の手法を受けついでおり、朝鮮の標準語整備における小倉の影響はけっして小さなものではないと思われる。

## 【参考文献】

<日本>

- イ・ヨンスク[1997]『国語という思想』岩波書店  
上田万年[1895]「標準語に就きて」『帝国文学』第一卷一号  
小倉進平[1920/1964]『朝鮮語学史』刀江書院  
小倉進平[1944]『朝鮮語方言の研究』岩波書店  
金沢庄三郎[1910]『日韓两国語同系論』三省堂書店  
金沢庄三郎[1911]「朝鮮併合と国語問題」『教育学术界』23-4  
金沢庄三郎[1929]『日鮮同祖論』刀江書院  
国語調査委員会[1906]『口語法調査報告書』  
国語調査委員会[1908]『口語法取調に関する事項』  
国語調査委員会[1916]『口語法』  
国語調査委員会[1917]『口語法別記』  
東条操[1928]「方言採集手帖」郷土研究者  
東条操[1935]「方言語法の調査」『方言』第五卷二号  
邢鎮義[2008]「近代日本における標準語政策」『日語教育』第45輯  
安田敏朗[1998]『帝国日本の言語編制』世織書房  
安田敏朗[1999]『言語の構築』三元社

<韓國>

- 高永根[1998]『한국어문운동과 근대화』탑출판사  
金敏洙[1973]『國語政策論』고려대학교출판부  
이병근[2006]「1910년~20년대 일본인에 의한 한국어 연구의 과제와 방향-小倉進平의 방언연구를 중심으로」『일제 식민지 시기 언어와 문학』서울대학교규장각한국학연구원  
최현배[1936]『시골말캐기잡책(方言採集手帖)』朝鮮語学会  
한글학회[1996]『한글』創刊号~93号(1927年2月~1942年5月)

## 要 旨

朝鮮語における最初の方言調査は小倉進平によって行われる。小倉は、1911年から朝鮮総督府に勤務しながら、済州島から北の咸鏡道まで200回以上を回って、方言調査を行い、数多くの論文を著し、単行本を残している。その調査は1903年から日本で行われた国語調査委員会による方言調査を参考にしたものと思われ、調査対象の選定、方法など類似する部分が多い。そして小倉の方言調査により、朝鮮に標準語なるものと、方言なるものの概念が広がり、用語として「方言」が広がる契機となった。そして方言調査の必要性和手法を朝鮮に伝えた。なお、小倉のこのような活躍は、日本の国語構築の一環として行われたと思われる。

朝鮮における方言調査は1935年、朝鮮語学会の機関誌である『한글 (ハングル)』に「方言調査」という欄が設けられ、各地から方言資料を集める形で行われる。1942年5月まで、55回にわたって集めた方言資料は朝鮮語辞典の資料となる。

日本の方言調査のように、国家機関の主導のもと、専門家の指導で行われた調査ではないが、この調査により、標準語に対する意識が広まり、これらの資料により朝鮮の方言学、方言地図、方言区画論の基盤が整ったことは注目に値する。

キーワード：標準語、方言、方言調査、国語、小倉進平、朝鮮語学会、  
国語調査委員会

투 고 : 2011. 2. 28

1차 심사 : 2011. 3. 19

2차 심사 : 2011. 4. 2